

ジャンヌ・ダルク—女性の力が歴史を変える—

高 村 忠 成

1. 今、なぜジャンヌ・ダルクか

ジャンヌ・ダルクは、フランス15世紀初頭の一少女です。イギリス軍に攻められ存亡の危機に陥ったフランス軍をたて直し、見事にフランスを大勝利に導いた少女がジャンヌ・ダルクでした。奇跡の乙女ともいわれています。彼女は今から約600年ほど前、フランスのドンレミという村の農家の娘として生まれました。当時イギリス軍がフランスの国土の約3分の2を占領しており、あわやフランスは全滅かと思われた時、ジャンヌ・ダルクは立ち上がったのです。イギリス軍を追い払い、王太子シャルル7世をフランス国王として即位させ、今日のフランス国家の土台を作りました。少し大袈裟にいいますと、今日のフランスという国家は、17歳の一農家の娘によって救われ、築かれたといっても過言ではありません。そのため、救国の少女・ジャンヌ・ダルクといわれているのです。

ここで一言お断わりしておきたいことは、ジャンヌ・ダルクを語る時、その時代は、ヨーロッパではキリスト教色が大変強かった、ということです。ジャンヌ・ダルクに触れる時、キリスト教を背景にしないと少し理解できない点があることをお断りしておきます。非常に宗教色の濃い時代だったのです。したがって、当時は常識でも、今日では少し考えられないこともあります。どうかこの点は少し捨象しながら、ジャンヌ・ダルクが物語っていることを把握していただきたいと思います。否、現代に語りかけているメッセージを掴んで下さい。

このことは、なぜ今ジャンヌ・ダルクなのか、という問題にも関連します。自分の信念のままに行動し、戦い、そして勝利を収めていく。これがジャンヌ・ダルクの生き方でした。時代は今、「武士道」ブームです。新渡戸稲造の『武士道』という本が大変に広く読まれております。映画やテレビの時代劇はあまり人気がないのですが、「武士道」という精神は人々の心の中に賛同を得ているのです。これは、時代が、今行く手を見失っている。人々が自分の生き方に迷っている。何を自分の人生の土台としていいのか分からない。そういう迷いの中にあって「武士道」というものは、人間としての生き方に一本の道筋を示している。すなわち、どんなことがあろうとも、時代がどう変わろうとも、自分の信念のままに突き進んでいくという、人間の一つのあり方に、人々は共感を覚えているのではないかと思います。

じつはジャンヌ・ダルクが問い掛けているものは、これにやや似ている点がある

のではないのでしょうか。信念がない、目的に殉ずる生き方がない時代において、一つの指針を示しているのが彼女の振舞いであり、行動なのです。

とくに、女性が歴史の扉を開いた意義、これは大変に大きいと思います。今日でも、女性が時代の流れを決する時になっております。近年のオリンピックを始めとするスポーツでも、女性の活躍が目立っております。今は女性が時代の流れを決めているといつてよいでしょう。ジャンヌ・ダルクはその先駆けであり、典型でした。歴史を創ったのが、ジャンヌ・ダルクという一女性だったのです。そのことを学びあうのが、今なぜジャンヌ・ダルクなのか、ということの答えなのです。このことを、別の角度からいえば、女性が純粋に自分の信念を自覚し、その信条のままに立ち上がれば、どんな不可能をも可能にしていく、そして時代転換の偉業を成し遂げていける。このことが、ジャンヌ・ダルクが発しているメッセージです。とくに、厚い信仰心に基づいた女性の戦いは奇跡を起こす、ということを彼女は体現したのです。

2. ナポレオンとジャンヌ・ダルク

さてフランスでは、今もって、一番有名なのは、男性ではナポレオン、女性ではジャンヌ・ダルクといわれております。ナポレオンは大変な偉業を成し遂げました。たんに戦闘に勝っただけではありません。後世に残るような民法典を始め様々な政治・経済・社会の制度を作りました。しかし、ナポレオンはローマ教会から「聖人」にはされておられません。これに対して、ジャンヌ・ダルクはナポレオンと比べると華々しい業績は残しておられません。もちろんフランスを救ったことはすごいのですが、その後の政治、社会制度を改編するというようなことはしていません。それでも彼女は、1920年にローマ教会から「聖人」とであると認められました。これを「列聖」といいます。聖人の仲間入りをしているのです。もっともこれは、ナポレオンはキリスト教徒ではなく、ジャンヌ・ダルクは熱心なキリスト教徒であったということから生じている差なのです。

なお、ジャンヌ・ダルクの映画は、1898年から2004年に至るまで、25本も作られているのです。これは大体、4年に1度はジャンヌ・ダルクの映画が作られているという計算になります。それほど今日においても、フランスをはじめ多くの国々で、ジャンヌ・ダルクの存在は、不思議な、魅力ある少女として光が当てられているのです。

ともあれ、ナポレオンとジャンヌ・ダルク。この二人が今日のフランスを築いた2大支柱をなす人物であるといつても過言ではありません。とくに、ジャンヌ・ダルクについては、フランスのオルレアン市では、彼女がイギリスの支配からその街を救ったということで、570年以上に渡って毎年、記念の祭が行われています。すなわち、ジャンヌ・ダルクがオルレアンの街を解放した5月8日に、「ジャンヌ・ダルク祭」が開催されております。5月7日が前夜祭、5月8日が「ジャンヌ・ダルク祭」となっているのです。この祭には、歴代のフランスの大統領、たとえばド

ゴール、デイスカール・デ・スタン、ミッテラン、そして現在のシラク大統領が参加しています。ジャンヌ・ダルクは今もフランス建国の象徴であり、フランス人の心の中に生きているのです。

ジャンヌ・ダルクの親友であったアラン・ソンポーという人は、「ジャンヌのことは、思い出すだけでも勇気が出る」といっていますが、じつに彼女は、今でもフランス人の勇気、希望、理想の源泉なのです。

なお、ナポレオンとジャンヌ・ダルクがフランスを代表する二人の英雄であるといいましたが、この二人の関係には面白いエピソードがあります。といいますのは、ジャンヌ・ダルクは15世紀始めの人であり、ナポレオンは18世紀末から19世紀始めの人でありますから、二人が出会うということはもちろんありません。ところがこの二人はある種の間接的な関係をもつことになるのです。どういう関係かといいますと、ジャンヌ・ダルクについては、彼女の死後、しばらくすると、オルレアン（フランス東部の都市）の街以外ではだんだんと人々から忘れ去られていきます。もちろんジャンヌ・ダルクの名誉を回復する裁判が長く行われたりして、それなりの話題はありました。それでも年月がたつうちに、だんだんと人々の記憶からは薄れていったのです。その忘れ去られていったジャンヌ・ダルクを一躍有名にしたのが、ナポレオンだったのです。

どういうことかといいますと、フランス革命の最中に、武器製造の目的でオルレアンにあったジャンヌ・ダルクの像は破壊されてしまいました。革命の動乱がおさまると、早速、その像を再建しようという動きがおこり、1803年、像は完成しました。再建式典が行われたとき、ナポレオンはそれに参列します。そして彼は次のように祝福したのです。「フランスの独立が脅かされるときには、優れた英雄が出て、必ず奇跡をもたらしてくれることを、あのジャンヌ・ダルクは証明している」と。このナポレオンの祝辞以来、ジャンヌ・ダルクの名前はフランス全土に広まったといわれています。飛ぶ鳥落とす勢いのナポレオンによって称賛されたジャンヌ・ダルクは、一気にフランスの英雄になったのです。この意味で、ナポレオンとジャンヌ・ダルクは深い関係をもっていたといえるのです。ともあれ、ナポレオンと並んでフランス人の心に残っているジャンヌ・ダルク。とくにオルレアンにおいては、今もって彼女を賛える祭典が行われているという事実には驚かされます。

3. ジャンヌ・ダルクと日本

ジャンヌ・ダルクはフランスのことではないか、日本とはあまり関係がないではないか、という疑問をおもちの方がおられると思います。日本とジャンヌ・ダルクとはどういう関係があるのか、ということについて考えてみたいと思います。ジャンヌ・ダルクの時代は1412—1431年までの約20年です。ちょうど、15世紀の始めです。この頃は、日本でいうと室町幕府が誕生した頃にあたっています。すなわち、平安、鎌倉、室町と、こう時代が下っていくわけですが、室町時代というのは南北朝の動乱が続き、朝廷の力が地に落ちた時です。代わって武士が力をつけてき

ます。そして足利義満が京都に金閣寺を作りますが、それが1397年です。ジャンヌ・ダルクが生まれたのが1412年ですから、ちょうど足利義満が金閣寺を作った10数年後に彼女が生まれました。金閣寺とジャンヌ・ダルクを結びつけば、日仏両国の時代イメージを思い浮かべることができるのではないかと思います。

この足利義満は武家の力を誇り、お隣の中国、すなわち、当時は明の時代でしたけれども、中国の明の王朝に盛んに遣いを出して、明との貿易を活発にします。その経済力を背景に武士の力をさらに強めていったのです。それがちょうどジャンヌ・ダルクの生きた時代にあたっていました。フランスでは、イギリスにせめられ、フランスが危い時、日本では、武士が台頭し、武士による政治支配が行われ始めた時、これがジャンヌ・ダルクの時代の日仏両国の状況でした。

それではジャンヌ・ダルクは日本にいつ頃紹介されたのでしょうか。それは案外古いのです。享和元年といえますから1801年、すなわち江戸時代の中期から後期にさしかかる頃、オランダの蘭学者である山村才助という人が『西洋雜記』という本を書き、その中で「オルレアン少女の説」ということで、ジャンヌ・ダルクのことを紹介しているのです。フランスでは、ナポレオンによってジャンヌ・ダルクが全国的に有名になる以前、日本では江戸時代に、すでにジャンヌ・ダルクは日本に紹介されていたということになります。そして明治になると、有名な文豪、徳富蘆花が『世界古今名婦伝』という本のなかで「オルレアンの少女」というテーマでジャンヌ・ダルクのことを取り上げました。この作品によって、彼女の存在は広く日本人の間で知られるところとなりました。続いて、ジャンヌ・ダルクを有名にしたのは新渡戸稲造です。新渡戸稲造による紹介で、ジャンヌ・ダルクは日本国民の間でも英雄の名前を博します。新渡戸稲造は明治11年、札幌にいた15歳の頃からジャンヌ・ダルクへの思いを深めます。彼はキリスト教徒ですが、キリスト、ジャンヌ・ダルク、仏陀、モハメットを精神の糧にします。キリストと仏陀とモハメットといえ、これはキリスト教、仏教、そしてイスラム教という三大宗教の創始者ということでわかるのですが、どういうわけか、そこにジャンヌ・ダルクが入っています。なぜかといいますと、新渡戸稲造はジャンヌ・ダルクの純粹に神を信ずる心、そして国王を戴冠させる忠誠心、これらは武士の心構えに似ていると考えました。ジャンヌ・ダルクの姿勢の中に、彼は武士道の精神を見出したのです。それほど彼は、ジャンヌ・ダルクへの思いを深くしていたといわれています。新渡戸稲造は明治23年、パリの万国博覧会に参加しますが、その時ジャンヌ・ダルクが生まれた村、ドンレミ村をわざわざ訪れております。このように新渡戸稲造がジャンヌ・ダルクを日本において有名にしたといっても過言ではありません。

そして、ジャンヌ・ダルクを学問的に取り上げたのが、箕作元八という東京大学の教授です。箕作教授は大正3年12月、「ジャンヌ・ダルクの性格とその使命」という論文を書きました。この論文がジャンヌ・ダルクを日本に学術的に紹介したといわれております。このようにジャンヌ・ダルクはナポレオンと並んで、江戸時代から明治・大正期にかけて広く日本に紹介されました。そして、歴史を創った英雄として、長く日本でも尊敬の対象となってきたのです。とくに女性の理想像として

彼女は崇められてきました。

4. 100 年戦争

さて、ジャンヌ・ダルクの生涯に入る前に、「100 年戦争」について少し触れておく必要があります。100 年戦争とは、1339 年から 1453 年まで、約 100 年に渡ってイギリスとフランスの間で戦われた戦争です。ヨーロッパは今では、大変に美しく人間の住みやすい場所が多いのですが、このヨーロッパの発展は「革新の 12 世紀」といわれた 12 世紀からです。それ以前は、森におおわれておりました。12 世紀から本格的な開発が始まったのです。もう少し時間を広くとれば、11 世紀、12 世紀、13 世紀にかけてヨーロッパの大いなる発展があったのです。なかでも「革新の 12 世紀」といわれた同世紀に、一大農業技術の進展があり、ヨーロッパは非常に豊かになっていくのです。

この農業を基盤にしていたのが封建領主と呼ばれる人たちでした。当時は封建領主が中心で、まだ国王というような偉大な軍事力、経済力をもった人は数多くはおりませんでした。ところが農業技術が発展すると封建領主、封建貴族とよばれる人のなかから大きな力を持った人が出てきました。すなわち、封建領主のなかから、やがて軍事力と経済力を蓄えた人が、国王となって君臨しようとするのです。それが、国王という存在ですが、これがイギリスやフランスの地に現われ始めました。そして国王たちは、自分の領土を拡大しようとして、戦争や駆け引きや政略結婚や、あらゆる企みをはかります。自分の勢力拡大に躍起になるのです。

なお、「イギリス」「フランス」と我々は、今日、いっておりますが、12、13 世紀の頃は、まだ今日のような「イギリス」「フランス」というようなはっきりとした国家の区別はありませんでした。すなわち、イギリス王国の君主といってもじつはフランスの封建領主の出身者でした。つまり、フランスの封建領主がイギリスに渡ってイギリスを支配しました。そしてフランスの領土を拠点にさらに自分の領土の拡大をはかったのです。イギリスに渡ったフランスの封建領主が再びまたフランスに攻めてこようとします。そこで、フランスの封建領主から国王になろうとしていた人たちは、そうしたイギリスに渡った貴族、封建領主、国王たちと戦争をしあっていたのです。したがって、今日の「イギリス」「フランス」というのはっきりした国家の立て分け方からいうとわかりづらいのですが、要するに「イギリス」と「フランス」は入り乱れていたのです。イギリス国王も当時はフランス語を話していたといわれています。このような状況の中で、「100 年戦争」は起こりました。

そのきっかけは、1339 年、イギリスの国王となっていたエドワード 3 世がフランスを攻めた、すなわちフランスの国王を兼ねようとしたことにあります。フランスは、このイギリスの侵略に対して、いかに対応するかで大きく二つに分かれました。イギリス国王と結託してフランスに迎え入れようと策略していたのがブルゴーニュ侯という封建領主でした。彼が今日のフランス北部を支配していました。そしてイギリスに真っ向から対立しようというのがフランス国王シャルルでした。しか

し、この肝腎なフランス国王はフランスの南部の方に追いやられていました。結果的に、当時のフランスは、北部の3分の2がイギリス、イギリスと結託したブルゴーニュ侯によって占められ、一番純粋なフランス王であるべきシャルルは南部の方に、いわば逃げていたという形になっていたのです。

5. ジャンヌ・ダルクの歴史的意義

ジャンヌ・ダルクが生まれたのは、こうした時代状況の中で、しかもイギリスの支配が大変に強かったドンレミ村という、いわゆるフランスの北東部でした。そのため、彼女の村はたびたびイギリス軍に襲われていたのです。要するにフランス本土は、イギリスとイギリスに味方するブルゴーニュ侯が北部を占め、フランス王はフランス南部の方に退避していたという三つ巴の状態にあったのです。

そして、結果的にいうと、100年戦争は、ジャンヌ・ダルクの出現により、フランスがイギリスを破り、イギリスを今日のイギリスの島へと追い返すことに成功した戦争となりました。100年戦争は、最終的に、フランスの勝利で終わったのです。では、この100年戦争はフランスに何をもたらしたのでしょうか、その後のフランスにどのような影響を与えたのでしょうか。それは、一つには、国王中心の中央集権体制が確立したことです。それまでいくつかの封建領主や、封建貴族が分立するという状態でしたが、100年戦争以後、国王の力が強くなり、国王を中心とする中央集権体制が出来上がっていくのです。とくにフランスでは、ランスで戴冠したシャルル7世による王権が強くなり、フランスの国王中心の時代が到来するのです。もう一つは、100年戦争によって今日の国民国家と呼ばれるものの土台が出来ました。すなわち、それまではフランスだ、イギリスだというような国家の区別が曖昧だったのです。しかし、百年戦争によって、「フランス」「イギリス」という国家の形がだんだん確立していった。それぞれの住民たちが、自分たちは「フランスの国民である」、「自分たちはイギリス国民である」という、今日でいういわゆる「国民国家」という意識をもち始めたのです。イギリス、フランスの複雑に入りこんだ領土関係が清算され、「イギリス」は「イギリス」に帰り、「フランス」は「フランス」の国土に確定するという、はっきりした国家の形態ができてくるようになりました。やや難しい表現をしますと、「中世的な分裂形態」が解消され、近代的ないわゆる「絶対主義」国家による国家体制が確立するようになったのです。これが100年戦争の意義であり、その発端を切り開いたのがジャンヌ・ダルクの戦いでした。彼女の勝利で新しい時代が開かれたといえるのです。

このように百年戦争以前の英仏関係は大変に複雑でした。ジャンヌ・ダルクが生まれた頃、フランスは、イギリス、イギリスに味方するブルゴーニュ侯、それからシャルル王太子のフランスというように大きく3つに分裂していたのです。その中でジャンヌ・ダルクはイギリスを破り、王太子シャルル7世をフランス国王として即位させました。フランス統一国家の今日の土台を作ることに成功したのです。ジャンヌ・ダルクの歴史的意義はこの点にあります。

6. ジャンヌ・ダルクの生涯

まず、ジャンヌ・ダルクの生涯を概観しておきたいと思います。彼女は、どのような一生を送ったのでしょうか。彼女は、1412年、フランス北東部のドンレミ村という人口200人ほどの小さな村に生まれました。父ジャック・ダルクと母イザベル・ロメ夫妻の四人目の子供でした。小村ですが、彼女の家はそんなに貧しくはなかったようです。むしろ裕福な方だったともいわれております。1425年、ジャンヌ・ダルクは13歳の時にはじめて神の声を聞きます。それは、最初は、「行いを正しく、教会に熱心に通うように」というものでしたが、その後、だんだん具体的になっていきます。すなわち、「イギリス軍を追い出し、亡命中の王太子をシャルル7世として戴冠させなさい。それが、ジャンヌ・ダルクの使命である」というようになるのです。そしてジャンヌ・ダルクは、そのお告げ通り、1429年3月に、シノンという場所で王太子、後のフランス国王シャルル7世に会います。そして同年5月8日、オルレアンの戦いに勝利し、その町を開放します。ジャンヌ・ダルク17歳の時でした。2ヵ月後の1429年7月に、王太子はランスに入城します。ランスというところにはノートルダム大寺院という立派な寺院があり、フランス国王はその大聖堂で戴冠式を行うことによって、初めて正式にフランス国王になるという伝統がありました。王太子シャルルはジャンヌ・ダルクの助けにより、無事戴冠式を行い、晴れてフランス国王になります。1429年7月17日のことです。しかし、パリ解放をめざしたジャンヌ・ダルクは翌年5月23日、コンピユーニュというところでブルゴーニュ侯軍に捕まってしまう。そしてイギリス軍に引き渡され、イギリス側はパリ大学神学部の力をかりて、1431年、彼女を宗教裁判にかけます。同年5月に下された判決は死刑でした。理由は、彼女が正統な信仰をもたない異端者であり、魔術を使う女だからというのです。それに対して彼女は、一旦は改悛の情を示します。だが、信念に匂ずる道を選んだ彼女は、すぐにそれを翻します。当時、一旦認めた罪を再び翻せば火刑でした。当時の慣例にしたがって、1431年5月30日、ジャンヌ・ダルクは死刑になります。火刑により、彼女は19歳の短い生涯を閉じたのでした。

ここで彼女の生涯を、ナポレオンのそれと比べると非常に違う点があります。ナポレオンはその一生において実に沢山のことをしました。しかし、それに対してジャンヌ・ダルクは、王太子に会い、イギリス軍を打ち破り、王太子を国王に就任させる。さらにパリに進軍し、フランスを完全に解放しようとしませんがイギリス軍に負け、捕まって、宗教裁判にかけられる。そして火あぶりの刑に処せられて生涯を終える。このように話としては非常に簡単です。ナポレオンの場合は業績も多く複雑なんですが、ジャンヌ・ダルクの生涯は簡潔です。

若干17歳で歴史の舞台に登場し、19歳でその役割を終える。わずか2年間の出来事でした。しかし、ジャンヌ・ダルクが後世に残したものは、その後の歴史の流れを変えるなど非常に大きなものでありました。しかも、ジャンヌ・ダルクの魂

は、彼女が火刑に処せられて、それで終わりというわけではありませんでした。

彼女が1431年5月30日に火刑に処せられてから20年後、1450年2月、国王シャルル7世はその裁判の見直しを命じます。そして、1456年7月7日、ジャンヌ・ダルクは異端ではなかったということで無罪になります。さらに400年後の1894年、彼女はローマ法王庁から「尊者」の称号を贈られます。そして、1909年、同じ法王庁から「福者」の称号を与えられ、1920年5月16日、すなわち第一次世界大戦が終わった翌年、今度はローマ法王庁から「聖女」の称号を与えられるのです。実に、死刑判決から500年後、ジャンヌ・ダルクは魔女どころか神に近い女性、「聖女」の称号をえるのです。こう考えると、ジャンヌ・ダルクの話は非常に息の長い、年代も長期にわたるものです。最初は魔女といわれ、500年後には「聖女」と崇められる立場になったのです。しかも、歴史のイメージとしては、フランスを救った英雄として、燦然とその名前は輝いております。フランスのナショナリズムのシンボルにもなっています。しかも更に広く、世界の多くの人々に、国家存亡の危機を救った勇者として刻印されているのです。

7. 「神の声」を聞く

ジャンヌ・ダルクは、前述したように、1412年1月6日、農家の4人目の子供として生まれます。故郷ではジャネットと呼ばれていましたが、後にランスに来てからジャンヌといわれるようになったようです。この時代は父母のどちらの姓を名乗ってもよかったようで、お父さんのジャック・ダルクという名前を受けてジャンヌ・ダルクといってもよいし、または、お母さんのイザベル・ロベをとってジャンヌ・ロベを名乗ってもよかったようです。

よく彼女が羊飼いの娘ではなかったかといわれるのですが、そうではないようです。彼女自身、「牛や家畜を野原に連れ出すことは一度もなかった」といっております。むしろ、「布地を縫い、糸を紡ぎ、袋を作ることにおいては誰にも負けなかった」と自負しています。彼女が羊飼いの娘であるというのは、後に宗教裁判で、裁判官たちが彼女を魔女にするために「羊飼いの女」というイメージを作り上げたためといわれております。といいますのは、「羊飼いの女」には、「占い師」、もしくは「魔術を使う者」という伝説が当時ありましたので、「羊飼いの女」と決めつけ、彼女を魔女に仕立て上げようとしたからです。

なお、ジャンヌ・ダルクがどのような風貌だったのかということについては、まったくの謎です。当然写真はありません。背が高かったのか低かったのか、美しかったのか、そうでなかったのか、太っていたのか痩せていたのか、全くの不明です。現在では推測のしようもありません。ただ、彼女の死後、たくさんの人が彼女について、いろんな絵を描いております。ジャンヌ・ダルクの絵は多く残っているのです。だが、本物のジャンヌ・ダルクの実像についてはいまだに謎です。ただ最近、ジャンヌ・ダルクの鎧が見つかったというニュースがフランスで流れました。ジャンヌ・ダルクの肩に矢が刺さったのは事実のようですが、その鎧にも確かに矢

が貫通した後があるのです。本物の鎧かどうか、今まだ鑑定中ですが、もし本物とすると、その鎧の形から、ジャンヌ・ダルクはだいたい160 cmくらいの身長、中肉中背の体軀ではなかったか、と推測されています。

ともあれ、ジャンヌ・ダルクは、両親にも兄弟にも恵まれ、ドンレミ村という平和な村ですくすくと育っていました。イギリス軍が攻めて来て、苦境に陥ることもありますが、全体的には平和であったようです。それが彼女が13歳の時、ある日突然、夏の正午、神の声が聞こえてくるようになり、運命が変わります。その声は、最初は、「ジャンヌよ、行いを正すように」、「神を助けるように」、また「信仰を全うするように」、という信仰に関することが多かったようです。彼女は一体誰がしゃべっているのか、誰の声なのか、と思うのですが、やがてこれは、神のお告げであると固く信じるようになります。それ以来、彼女の耳には神のお告げが頻繁に聞こえるようになり、かつ具体的になっていきます。そして、彼女が16歳になった時、「ジャンヌよ、オルレアンの囲みを解け。そしてイギリス軍を追い払え」、さらに、「シャルルを国王としてランスで戴冠させよ」、すなわち、「王位に就けなさい」と、その声は明確に彼女に指示を出したのです。この辺りは、現代の私たちにはちょっと信じ難いところですが、彼女はその声の意味をはっきりと自覚するようになったといわれております。一方、彼女の父親も夢を見ます。それは、娘が兵士とともに出兵する、というものでした。夢から覚めた父親は、もしそのようなことになれば、自分の手で娘を水に付けて殺す。娘にはそのようなことはさせないと、いいます。ところがジャンヌ・ダルクの耳には、あまりにもしばしば神の声が聞こえてきます。父親には打ち明けられないため、彼女は近くに住む叔父に相談します。叔父は、彼女の真剣な訴えに耳を傾けます。そして、「ヴォークルールの街のボードリクール守備隊長のところへ行った方がよい」と助言してくれます。彼女は叔父とともにヴォークルールへ行って彼に会い、神のお告げの話を率直に語ります。ところがボードリクールはそのような話は信用せず、「嘘をつくな」といって彼女に平手打ちをくらわせます。それでも彼女は、何回もボードリクール守備隊長に自分が聞いたという神の声の内容を伝えます。そして、決定的になったのが、「オルレアンでフランスは敗れたのでしょうか。そのオルレアンの街を開放しなければなりません」、といった彼女の一言でした。ボードリクールは、「なぜこの娘がそのようなことを知っているのだろうか」と驚き、彼女のいうことを信用するようになったのです。

8. 「神の声」とは

こういう話を聞きますと、「神の声を聞いた」とか「神のお告げを信じた」とか、それは一体どういうことなのか、私たちには戸惑う点があると思います。それには、この時代の、ヨーロッパの精神的気風を知る必要があります。ジャンヌ・ダルクの時代は、中世でキリスト教の信仰が非常に強く根を張っておりました。このようなジャンヌ・ダルクの時代には、女性が「神の声を聞いた」というようなことは

珍しいことではなかったといわれております。何人もの女性が、「神のお告げを聞いた」、「神の声を聞いた」というようにいっていたようです。それに対して、もちろんそれを否定する声もありましたが、一方では肯定し、認める雰囲気もありました。そうした宗教的な気風が濃厚だったのが、ヨーロッパの中世だったのです。少し難しい言葉でいいますと、「超自然」と「現実」とが人々の日常生活の中で混じりあっていたということになります。それほど宗教的な空気、雰囲気、風習、そういうものが濃厚な時代だったのです。

もちろん、前述したように「神の声を聞いた」というようなことがすべてそのまま認められたわけではありません。中には、錯覚である、とか、「詐欺」、「語り」、「狂女」、「魔女」であるとかいわれて糾弾されることもありました。それが、宗教裁判です。ジャンヌ・ダルクの場合も、彼女が捕まって宗教裁判にかけられ、さんざん批判されます。彼女は異常な精神状態にあって幻覚を見たのだ、というようにも断定されました。しかし、ジャンヌ・ダルクの場合は、宗教裁判でも明らかにされるのですが、13歳から17歳の頃の彼女は大変に健康で丈夫な女性で、そのような幻覚に惑わされる女性ではありませんでした。大事なことは、彼女が「神のお告げを信じた」ということです。彼女は、神が「私の前に現れたんです」と断言します。そこに見られるのは、頼るべきは自分の信仰のみで、自分の信念に従うという姿勢です。彼女は毅然と立ち上がりました。ここが非常に大事なところ。強い信仰心に燃え、今日の言葉でいうと、一つの使命を実感したこと、これがジャンヌ・ダルクが「神の声」を聞いたということの意味だと思います。

よく「使命」とか「使命感」といいますが、よく考えれば使命というのは事前にはわかりません。大事なのは使命感だと思います。「使命」とは自分で感ずるものなのです。ジャンヌ・ダルクが「神のお告げ」を聞いたということも、何か神懸かり的なことのように思われますが、これは現代風にいえば、彼女が一つの使命感を感じ取った、覚知したと解することができるのではないのでしょうか。彼女の出発点は、自らの使命の覚知にあったのです。

9. 王太子に会う

「神の声」に自分の使命を感じた彼女は王太子に会い、一刻も早く国王として戴冠することが大切であると訴えようとします。そのためにはまず、オルレアンを解放しなければなりません。このように彼女は自分の歩むべき道をしっかり見定めていきます。しかし、ことはそう簡単にはいきません。守備隊長ボードリクールにして見れば、彼女をやすやすとシャルルに会わせるわけにはいきません。彼は、彼女にいくつかの実験というか、質問をします。いわゆる予備検査というものをするのです。それはまず、彼女の信仰心についてでした。彼女の信仰がどれくらい純粋なものか。これについては、教会の法学者と神学者が彼女に次々と質問を浴びせました。彼女はその一つ一つに見事に答えます。その姿を見て、一同大変に驚き、彼女のことを聖女カトリヌの再来であるとみなします。次に、本当に純粋な乙女

であるかどうかの確認がなされます。これは当時のカトリック教会では大変に重要なことでした。それは悪魔（サタン）にとり憑かれていないかどうかを確かめる必要があったからです。魔女とサタンは交わるといわれておりましたので、ジャンヌ・ダルクが魔女ではないかどうか厳格な訊問が行われたのです。訊問の結果、すべての疑いは晴れ、彼女は正しいキリスト教信者であるということが認められました。そこで守備隊長ボードリクールは、彼女をシャルルに引き合わせることにします。

かくしてシャルルに会えることになったジャンヌ・ダルクはシノンの王城に向かいます。当時の封建領主や国王は一つの城に居を構えるというよりも、転々と自分の城を回って住むという習慣をもっていました。王太子シャルルは、当時シノン城におりました。ボードリクール守備隊長に連れられたジャンヌ・ダルクは、シャルルに謁見するため、その城におもむきます。ボードリクールから彼女が会いに来るということを事前に聞いていたシャルルは、一つのトリックを試みます。それは玉座には自分の家来を座らせて、自分は列席している貴族の中に紛れ込んだのです。こうしたなか、ジャンヌ・ダルクは案内されて部屋に入ってきます。彼女はもちろんシャルルに会ったことはありません。ところが、彼女は部屋に入ってくるなり、玉座には向かわず、貴族の中に紛れ込んでいたシャルルの前にそのまま歩み寄ったのです。そして彼女は彼にいいます。「王太子、私がジャンヌ・ダルクです」と。なぜ、シャルルを見破ったのか、これも一つの謎であるとされております。今日では、彼女のまれに見る強い感受性がたちどころにシャルルを見破った、といわれています。

シャルルに謁見して幾つか言葉を交わした後、ジャンヌ・ダルクは王太子に二人だけで重要な話がしたいといひます。王太子にしてみれば、ジャンヌ・ダルクという、なんだか訳のわからない娘が突然自分の前に現れて、二人だけで話をしたいというので、一瞬とまどいます。果してこの少女をどこまで信じてよいのか、わかりません。当時、王太子シャルルは24歳、ジャンヌ・ダルクよりも7歳年上でした。彼は半信半疑で、話をするべきかどうか迷います。するとジャンヌ・ダルクは、その逡巡を見透かすかのように、「私はあなたのために良き印を持ってまいりました」といひます。そこで王太子は、彼女と二人だけで話しあうことに応じます。その結果、シャルルが彼女のことを信じることになります。それには2つの理由がありました。そのひとつは、ジャンヌ・ダルクが王太子の出生の秘密を述べたからでした。

王太子、すなわち後の国王シャルル7世の父であるシャルル6世は、1392年に発狂しておりました。そして、王太子シャルルが生まれたのは1403年、すなわちシャルル6世が発狂してから11年後に王太子が生まれたことになります。こうしたことから人々の間では、王太子はシャルル6世の本当の子供ではないのではないか、もしかすると、シャルル6世の弟と王妃イザベルとの間の子供ではないかという噂がたっておりました。王太子はその噂に大変に悩んでおりました。「自分は正統な王位を継ぐものではないのではないか」、「自分は父の本当の子供ではなく、父

の弟の子ではないのか」、「非嫡子ではないか」、等々自分の出生の秘密を大変に気にしていたのです。そこに現れたのがジャンヌ・ダルクでした。彼女は王太子に断言します。「神の言葉として、あなたはフランスの真の王位継承者である」と。すなわち、神と自分の秘め事でしかないと思っていたことを、ジャンヌ・ダルクが「あなたはフランスの正式な王である」と保証してくれた。この一言は、王太子に彼女を深く信頼させる励みとなったのです。

もう一つは、ジャンヌ・ダルクの純粋な信仰心でした。彼女と話していると、何ともいえない清らかな信仰心を呼び覚まされ、王太子は、この女性は本当に厚い信仰の持ち主であると確信します。王太子自身、感動に対しては素直な心で受け止める性格でしたので、彼女の純粋さに強く動かされたのです。

かくして、シノン城で王太子の信任を得たジャンヌ・ダルクは、王太子に対して、一刻も早くオルレアンの街をイギリス軍から解放し、ランスの大聖堂で王太子が正式に国王としての戴冠を受けることが大事であると、説得します。彼女を信用した王太子は、即座に彼女にオルレアン解放の命を下します。彼女には十騎士、従者、伝令、鎧兜、剣が与えられます。

ただ、剣をもらう際、彼女はまた一つの不思議なことをいいます。それは、「サント・カトリヌ・ドウ・フェイエルローという教会の祭壇の下に埋まっている剣を掘り出してください」と王太子に頼むのです。実際、その場所を掘ってみると剣が出てきます。この剣には十字架の印が刻まれていました。

10. オルレアンの開放

ジャンヌ・ダルクの出陣の準備はすぐに整いました。彼女は一気にオルレアンに向かいます。オルレアンの街は完全にイギリス軍に制圧されていました。フランス軍は全く士気を喪失していたのです。しかし、ジャンヌ・ダルクが兵を率いて現れたとき、フランス軍はよみがえります。それまで戦う気力を失せていたフランス軍は立ち上がるのです。そしてイギリス軍を一気に攻め落としてしまいます。オルレアンの街はフランスの誇る要塞でした。そのため、ここをイギリス軍が占領してしまうとフランスは窮地に陥ります。しかもこの街は、もともと王太子シャルルのものでした。オルレアンの街の人々は、ジャンヌ・ダルクの雄姿に触れた時、王太子のため、わが領主を守るためとの使命感に燃え、イギリス軍を次から次へと撃破していったのです。

ジャンヌ・ダルクの戦いは、当時の貴族たちの戦いとは違っていました。一つの砦を破ればすぐ次の砦に向かう、というように、次から次へと攻め抜いていくという戦法でした。使命感に基づいた非常に激しい戦い方だったのです。これに対して、貴族たちの戦い方は少し違っていました。彼女は、戦いに勝つことのみが重要であり、そのために徹底的に攻撃し、勝ち抜く、これが彼女の戦法でした。ところが、当時の貴族や騎士たちにとっては、戦いは単に勝つだけが目的ではありません。それよりも見事な腕前を競ったり、武勇を誇示することの方が重要でした。す

なわち、いかに戦うかという戦闘振りが大事だったのです。したがって当時の貴族たちは、敵の力が強いとわかると途中で戦いを止めてしまうことがありました。そして戦いの中から少しでも利益を得ようと交渉に入るのです。勝敗を最後まで追及しないというのが当時の貴族たちの戦法だったのです。ところがジャンヌ・ダルクは、そのような戦法を全く無視しました。単に腕前や武勇を見せたり、形を取り繕うというのではなく、徹底的に戦い、攻め落とすというのが目的でした。最後まで勝敗をはっきりさせるというのが、彼女の戦いだったのです。

したがって、このようなジャンヌ・ダルクの戦い方には、さすがのイギリス軍も太刀打ちできませんでした。迫力が違っていたのです。戦闘中、彼女に向かって陰險な冗談を飛ばしたイギリス兵に彼女は叫びます。「死が間近に迫っているのに神を否認するのはまちがっている」と。すると、その兵士は直後に死んでしまった、といわれております。また、イギリス軍のある隊長が、彼女の降伏勧告に対して、「何をいうか」と逆らった時、彼女はその隊長に向かって、「汝は血を流さずに死ぬ」といいます。するとその男は直後に川に落ちて溺死してしまいました。彼女は「イギリス軍は駆逐されるであろう」と宣言します。「ラ・ピュレ」、すなわち「純粋な乙女」という意味ですが、「ラ・ピュレ・ジャンヌ・ダルク」という名前を聞いただけで、イギリス軍は震え上がったといわれるようになりました。ジャンヌ・ダルクがオルレアン戦に入る前には「200人のイギリス兵は400人のフランス兵を追い払う」といわれておりました。しかし彼女が現れてからは、「200人のフランス兵は1000人のイギリス兵を蹴散らす」と恐れられるような凄い力を発揮するようになったのです。

ここで、一言付け加えておくと、ジャンヌ・ダルクは旗を掲げて戦場を駆け巡っていただけで、彼女自身は一人の兵士も殺さなかったといわれております。ただ、「前進、前進」との号令を発しながら、兵隊を鼓舞していただけなのです。一人も殺しませんでした。彼女は、農家の娘として生れ、「針より重いものは持ったことはない」といわれるような女性でした。その女性が鎧兜をつけ、剣を持って、軍旗を掲げて戦場で戦う。これは普通では考えられません。使命に目覚めた一人の女性の振る舞い、それが全軍を奮い立たせたのです。ここに、人間の不思議な力を感じます。

11. 国王の戴冠

このように、王太子に会い、彼を説得して出陣し、イギリス軍に囲まれていたオルレアンの街を開放することにジャンヌ・ダルクは成功します。そして次に進むべき道として2つありました。ひとつは、そのまま一気に、やはりイギリス軍に抑えられているパリを奪還するか、それとも、ランスの大聖堂で王太子シャルルの戴冠式を行うか、この2つの選択があったのです。

その時ジャンヌ・ダルクは、迷わずに「まずランスでフランス国王としての正式な戴冠をすべきである」と、シャルルに進言します。何よりもまず、全フランス領

土が国王シャルル7世のものであることを宣言し、それからパリを奪還すればよい、というように彼女は主張するのです。パリの奪還よりも、国王としての戴冠の方が先であるというのが彼女の考えでした。シャルルは彼女の進言を取り入れ、ランスに向かうことにします。

パリにはノートルダム大寺院という立派なお寺がありますが、ランスにもそれに劣らないほどの荘厳な、由緒ある大聖堂があります。フランスの初代国王といわれたクロードヴィスがこの大聖堂で洗礼を受けて以来、フランスの歴代国王は、正式の就任式をここで行うというのが伝統となりました。すなわち、国王になるためには、ランスの大聖堂での列聖式、正式な国王としての就任式が必要となったのです。それにより、国王が超越的権威の持ち主であることが証明されるのです。この伝統に従い、シャルルは1429年7月17日、列聖式を行います。この知らせを聞いたイギリスは、慌ててまだ幼いヘンリー6世をパリで列聖させますが手遅れでした。パリで列聖式を行うよりも、ランスの大聖堂で行うほうが権威があったのです。シャルルは正式に、フランス国王シャルル7世として就任したのです。

ところが、シャルルは国王になりますと大きな心境の変化に見舞われます。これは、国王シャルル7世のジャンヌ・ダルクに対する裏切りになるわけですが、どういう心変わりかといいますと、方針の変更なのです。列聖式が行われる以前は、シャルルは自分はまだフランスの正統な王位に就くものではないのではないかという迷いがありましたから、ややもすると自堕落なところがありました。しかし、列聖式が終わり、国王になるや、政治力を発揮するようになります。「シャルル勝利王」とも名乗るようになるのです。そこで出てきた考えは、自分はもうこれ以上ブルゴーニュ侯やイギリス軍と戦う必要はないのではないか、イギリスがパリを返してくればその他の領土はイギリスにあげてもよいのではないかと、いうものです。この際、イギリス軍やブルゴーニュ侯と徹底的に戦うことはやめようという妥協策でした。この辺りで手を打って、自分の国王としての地位さえ安泰ならばそれでよしとする方針です。

これを知ったジャンヌ・ダルクは激怒します。国王の就任式が終わったならば、ただちに、パリを奪還する。パリを取り戻し、国王をパリに住まわせることによって、さらにフランス国王としての権威をフランス全土に行きわたらせると彼女は考えていたのです。実際、そうでなくてはなりませんでした。ところが、国王シャルル7世は戴冠式が終わった時点で保身に走るのです。もうこれで戦いは終わりにしよう。これで十分である。イギリス側と妥協しよう、と寝返るのです。これに対してジャンヌ・ダルクは、真っ向から反対します。徹底的に戦ってイギリス軍をフランスから追い払う、そうでなければフランスの真の勝利はない。これが彼女の考えでした。

12. ジャンヌ・ダルク捕まる

ところが、イギリス軍やブルゴーニュ侯との和解を企てようとする国王シャルル

7世にとっては、今度はジャンヌ・ダルクの存在は邪魔になります。かくして国王を無視してイギリス軍との戦いを止めない彼女は、1430年5月、コンピエーニュの戦いでブルゴーニュ侯軍側に捕まってしまいます。その時、国王シャルル7世の援軍は全くありませんでした。このようにジャンヌ・ダルクは、せっかくシャルルを国王の地位につけたのにもかかわらず、彼の裏切りによって、敵の捕虜になってしまったのです。

ジャンヌ・ダルクを捕まえたブルゴーニュ侯は、イギリス軍に近い、イギリスと結託している封建領主です。彼女を捕まえたブルゴーニュ侯に対して3つの勢力が彼女の身柄の引渡しを要求します。その1つは、イギリス軍です。2つ目は、パリ大学神学部。教会を代表するパリ大学神学部がジャンヌ・ダルクの身柄を要求するのです。その理由は宗教上のものです。パリ大学神学部には、キリスト教の教義をもっとも忠実に解釈する権限があるとの自負がありました。そこにジャンヌ・ダルクが突然現われ、一貫して神のお告げを聞いたといい、イギリス軍を打ち破り、国王を戴冠させる。パリ大学神学部にしてみれば、神の力を自分よりもはるかに凌駕して示す、この少女の存在は目障りでなりませんでした。できれば彼女を魔女として断罪したい。そして、自分の権威を保ちたい、との意向をパリ大学神学部は懐きます。そのためパリ大学神学部は、ジャンヌ・ダルクの身柄の引き渡しを強く要求したのです。3つ目は、シャルル7世です。自分を国王に戴冠させてくれたジャンヌ・ダルクを返してもらいたい、との当然の要求をしたのです。ところが実際は、強くは要求せず、彼は沈黙を保っていたといわれています。

こうした3つの勢力からの身柄引き渡し要求にあいますが、結局、彼女は、まずイギリス軍に引き渡されることになりました。ただ、イギリス軍は、世俗の裁判権しか持ちません。そこでイギリス軍は彼女を宗教裁判にかけ、その結果を見て、世俗的に裁こうとすることにします。そのため、すぐにパリ大学神学部にまわし、そこでの宗教裁判をまつことにします。宗教裁判では、正統か異端かという信仰上の判断をするだけで、世俗的な処罰をする権限はありませんでした。実際の処罰の執行は世俗の裁判所にあるという形になっていたのです。イギリスとしては、まず軍としてジャンヌ・ダルクの身柄を預かり、その上でパリ大学神学部で宗教裁判にかけ、その結果を待って世俗的に裁くという形にしたのです。なお、宗教裁判で無罪の判決が出たとしても、イギリス軍は彼女の返還を要求し、軍としての彼女の処遇を考えようとしておりました。イギリス軍にしてみれば、いずれにしても彼女を裁きたいとの意向は持っていたのです。

13. ジャンヌ・ダルクの扱いをめぐって

ここでもう少し、イギリス軍がジャンヌ・ダルクの身柄をブルゴーニュ侯から引き受けて、そのうえでなぜパリ大学神学部の宗教裁判にかけることにしたのかについて、考えてみたいと思います。それには3つの理由があります。

第1に、ジャンヌ・ダルクを宗教裁判にかけることによって、イギリスは全キリ

スト教徒に対して、自分たちこそ信仰を護る者である、正しい信仰の保護者であると喧伝しようとしたのです。ちなみに、キリスト教の歴史で、後にプロテスタントという新たな宗派ができる宗教改革が起こったのは16世紀です。ジャンヌ・ダルクの時代には、プロテスタントはなく、カトリックだけでした。キリスト教といえばカトリックでした。イギリスはジャンヌ・ダルクを宗教裁判にかけることによって、イギリスこそがすべてを神の裁断に仰ぐ、正しいカトリック信仰の保持者であることを示したかったのです。

第2に、イギリス軍はジャンヌ・ダルクに負けました。当時のキリスト教の考え方からすると、正統な宗教を受継ぐ者は負けるはずはなかったのです。負けるということは、正統な宗教を受け継いでいないからであるという一般的な原則があったのです。神は必ず正義のほうに軍配をあげるようになっていました。しかし、イギリス軍は負けてしまった。そこでイギリスは、イギリス軍が負けたのは魔女の出現によって負けたのだと仕立て上げようとしたのです。そこでイギリスは、あくまで正統であり、ジャンヌ・ダルクが異端であると宗教裁判で決着することが必要だったのです。

第3に、イギリスにとっては、魔女の使いであるジャンヌ・ダルクの助力によって、フランス国王に就任したシャルル7世は国王としての正統性を全く持たないと示したかったのです。彼女を魔女として認定し、フランス国王の権威の失墜をはかる必要があったのです。

以上の3点が、イギリスがジャンヌ・ダルクを宗教裁判にかけ、彼女を魔女に仕立てあげようとした理由です。

それでは、パリ大学神学部はなぜジャンヌ・ダルクの身柄を欲しがったのでしょうか。それは前述したとおり、パリ大学神学部には、自分たちこそキリスト教の解釈について正統な権利を持つ機関であるとの自負がありました。そのためここで、異端の疑いのあるジャンヌ・ダルクを召喚し、異端尋問にかけることによって、彼女を断罪すれば自らの権威を高めることができると考えたのです。

では、イギリス軍からパリ大学神学部に戻され、異端裁判にかけられることになったジャンヌ・ダルクに対して、フランス側はどのような反応をしたのでしょうか。一般的には、多くの民衆や兵士たちは彼女が捕らえられ、宗教裁判にかけられることを大変に悲しましました。しかし一部、フランスの司教達などの中には彼女のことを冷笑する勢力もありました。すなわち、「彼女は成功に酔いしれた。誰の意見も聞かず、また従いもしなかった。したがって、その傲慢さ故に神は彼女をお見捨てになったんだ」といったのです。純粋な信仰心を持ち、誰よりも神の意のままに行動する彼女のことを妬み、嫉妬したのです。

また、シャルル7世はどうであったかという点、ジャンヌが捕まった時点では、無関心を装っていました。それは、前述したように、シャルル7世は国王に就任するや、もうこれ以上戦いはしたくない。敵と妥協し、手を結んで、自分の国王としての地位が安泰ならばそれでよいと考えるようになっていました。そのため、イギリス軍と徹底的に戦おうとするジャンヌ・ダルクは目障りな存在になっていたのだ

す。そのため、彼女が捕まったことは、一面では国王にとって安心すべきことでした。しかし、もう一面では自分を国王にしてくれた恩もありました。そのため、彼の心境は複雑でした。したがって、一部には、シャルル7世は彼女が捕まった時、「彼女をイギリス軍に渡すな」といったともいわれております。また、宗教裁判の途中でも、「彼女に危害を加えたら報復する」とイギリス軍を恫喝したともいわれております。ただ、これらの発言には、はっきりした証拠はありません。複雑な心境であった国王シャルル7世は、明示的な言動を取れなかったのでしょう。しかし、はっきりしていることは、ジャンヌ・ダルクの死後20年経って、国王シャルル7世は、彼女の宗教裁判のやり直しを命じ、彼女を無罪にしたことです。

ともあれ、イギリス軍に味方するブルゴーニュ侯に捕らえられたジャンヌ・ダルクは、やがてイギリス軍に引き渡され、次にイギリス軍からパリ大学神学部に戻されて宗教裁判にかけられます。かくしてジャンヌ・ダルクの宗教裁判が始まります。裁判は、イギリスの根拠地であるノルマンディーの町ルーアンで行われました。

しかし、宗教裁判といっても、実際は宗教裁判の名を借りた政治裁判でした。といいますのは、宗教裁判は正統か異端かを決めるのですが、ジャンヌ・ダルクの裁判は彼女が魔女であるかどうかを決める裁判でした。だが、魔女裁判というのが活発になるのは16世紀になってからで、ジャンヌ・ダルクが捕まった15世紀には、まだ魔女裁判というのは一般的ではありませんでした。彼女を魔女として裁こうというこの宗教裁判は、むしろ魔女裁判の走りでした。ここに、イギリス軍の政治的意図が見え隠れします。イギリス軍としては、前述したように、パリ大学神学部の宗教裁判にかけることによって、なんとしてもジャンヌ・ダルクを魔女として認定してもらいたかったのです。すなわち、イギリス軍が敗北したのは、神に背いた結果ではなく、魔女の力によるものであると弁明する必要があったのです。ここに、ジャンヌ・ダルク裁判の本質がありました。

14. 宗教裁判

ジャンヌ・ダルクの裁判は、1431年2月21日以降、公開の裁判が1回、同じく1431年3月10日以降、獄中での非公開裁判が2回、行われたといわれています。当時、異端裁判は、すなわち、その人間が本当にキリスト教の教義に合った信仰をしているか否かということを裁く裁判は、弁護士をつけて行われるというのが一般的でした。しかし、ジャンヌ・ダルクの裁判では、弁護士が一人もつけられなかったのです。そのため、ジャンヌ・ダルクは、60人もの神学者や学者を前にして、一人で弁護の論陣を張らなければなりません。1431年3月21日、検事は70項目に渡る起訴状を彼女に突きつけます。その結論は、彼女は魔女、女預言者、神を冒瀆する女、異端であるというものでした。しかし、彼女は60人もの神学者を前にして容疑のひとつひとつに反論を加えていきます。冷静に、勇気を持って反駁していったのです。その結果、最終的に、1431年4月11日の裁判では、70項目に

渡る起訴状は12項目に削減されることになりました。

ただ、12項目に減ったとはいえ、彼女は有罪とされました。その理由は以下の3点です。

第1に、ジャンヌ・ダルクが聞いたといわれている神のお告げについてでした。これは空想の産物か、それとも作り事か、という問題を巡って争われました。彼女はこれに対しては、「天使が実際、自分の前に現われた。お告げは想像のものではない。まして幻聴などではない」と断言します。しかし、それは受け容れられませんでした。

第2に、国王の信頼を得た方法についてです。どのような悪魔的手段によってシャルルの信頼を勝ち得たのかというのが争点でした。それに対しては、彼女は「国王に関することは詳しくは話せない」、ただ「国王のいる部屋に天使が一人入ってきて、王冠を国王にもたらしただ。自分がその天使である」と主張して譲りませんでした。これは説明になっていないと却下されたのです。

第3に、彼女の男装が問題になりました。彼女は女性でありながら、なぜ男装をしたのかということです。当時は、キリスト教の聖書に従い、自分の性の衣服を変えるのは、神の前では慎むべきであるという考えが厳格に守られていました。すなわち、その時代は、身分、男女、階層などによって着る服装が決められていたのです。特に女性が男装をすることは、カトリックでは厳禁され罪とされていました。この点をジャンヌ・ダルクは責め立てられます。「なぜ男装したのか」と。これに対して彼女は弁明します。一つは、軍に身を置き男性の中で生活するには女性の服装では不便であること。二つは、牢の中で自分の身を守るためには男装でなくてはならなかったこと。三つには、神のお告げにより、使命を果たすために男装したこと。彼女のこの弁明は認められず、男装をしたということで彼女の処罰は免れませんでした。

以上3つの理由から、彼女は有罪とされました。信仰を強制する、カトリック全盛時代の15世紀においては、彼女のような言動はとても認められるものではなかったのです。

ともあれ、パリ大学神学部としては、彼女を有罪にしたいくなりませんでした。その理由は、ひとつは前述したように、自分の宗教上の権威を守りたかったこと。そして、もうひとつは教会に対する彼女の立場についてでした。すなわち、ジャンヌ・ダルクが神のお告げにしたがって行動したということは、彼女が、教会の仲立ちなしに、神と天使、天国の聖者などに通じているということを意味します。彼女のこの信仰姿勢は、教会を無視して人と神とが直結してしまうという風潮を高めてしまうことになります。カトリックとしては、教会を看過する信仰は何としても許せなかったのです。信仰と教会に関する根幹の部分揺るがしかねないという重要な問題をジャンヌ・ダルクは提起したのです。教会を経ずに、聖書を根本に各人が、直接神とつながっていくという信仰のあり方は、16世紀の宗教改革の結果誕生したプロテスタントの教えですが、ジャンヌ・ダルクの振る舞いはその先駆をなしていたといえましょう。教会中心の信仰を強制する、カトリック全盛時代の15

世紀においては、彼女のような行動はとても認められるものではありませんでした。

ともあれ、ジャンヌ・ダルクは、このような宗教裁判により、一旦は恐怖のあまり罪状を認めてしまいます。いわゆるジャンヌの「懺悔」です。しかしすぐにそれを翻し、再び男装に戻るなどいたします。こうした行為は、当時、異端再犯といって重罪に科せられることになっていました。すなわち、再び罪を犯した者として、火刑にされることになっていたのでした。かくして、パリ大学神学部から、イギリス軍の手に戻されたジャンヌ・ダルクは、1438年5月30日、あらゆる教会関係者、また彼女を陥れようとする勢力によって、ついに火炙りの刑に処せられてしまいました。ルーアンのヴィユ・マルシェ広場においてでした。

15. ジャンヌ・ダルクの復権

かくしてジャンヌ・ダルクのわずか19年の一生は終わるわけですが、国王シャルル7世にはどうしても気になることがありました。彼は、フランス国王としての地歩を着実に固めていきますが、何か心に引っかかるものがあつたのです。それは、ジャンヌ・ダルク裁判です。彼女が魔女であることを立証し、それと結んだシャルル7世には、国王としての権威がないというのがイギリスの主張でしたから、シャルル7世はこの点だけは断じて晴らしておく必要がありました。彼女が魔女ではないということを証明しなければなりません。そこでシャルル7世は、ジャンヌ・ダルクの処刑裁判のやり直しを命ずるのです。それは、1450年2月15日、ジャンヌ・ダルクが死んでからじつに20年の歳月がたっておりまして。

ただシャルル7世としては、彼女が魔女ではなかったということを証明する裁判が必要だったので、自分がそれを突然主張して行くと、どうしても政治的色彩が強くなります。そこで、彼女の肉親から嘆願書を出させるという形にします。すなわち彼女の名誉回復を求める願いを身内から出させるのです。こういう形式で1455年9月11日、やり直し裁判が開始されます。その結果、ジャンヌ・ダルクは晴れて無罪とされるのです。彼女は魔女ではない、彼女はその信仰において間違いのない、純真な少女であつた、ということが証明されたのです。これが、ジャンヌ・ダルクの復権裁判でした。

この復権裁判においては、多くの人々が証言しました。ある人は、彼女の最後の言葉は、「良きキリスト教徒として死にたい」ということだったとか、ある人は、彼女に対する最後の残酷さは死刑執行人を動転させたとか証言しました。一人のイギリス兵は、「ジャンヌ・ダルクが炎の中から逃げ出すのを見た」とまでいいだしました。「イギリス軍は破滅である」と叫んだイギリス兵もいたほどでした。

ともあれ、ジャンヌ・ダルクをめぐる2つの裁判については、次のことがいえると思います。すなわち、第1に、1431年のジャンヌ・ダルクを裁いた処刑裁判においては、宗教裁判という形をとっていたけれども、それは実質的にはイギリス軍が行ったものです。彼女を魔女に仕立て、イギリスが負けたのは正義に背いたから

ではない。魔女にかき乱されたためである。そして、ジャンヌ・ダルクの力によって国王になったシャルル7世の王位には正統性がない。魔女の仕立てによるものである。そのことを暴くための裁判が1431年の処刑裁判でした。

第2に、1455年、シャルル7世が起こしたジャンヌ・ダルクの復権裁判は全く逆でした。彼女は魔女ではないと。彼女の正しい信仰の力によって自分は王位に就いたのであるから、この王位は正当なものである、とシャルル7世は主張したのです。このように、ジャンヌ・ダルクの2つの裁判は、いずれもイギリスとフランスの、いわば政治的駆け引きの中での裁判でした。彼女にしてみれば、そうした政治性とは関係なく、終始、神の命令に従い、自分の純粋な信仰のままに生きた一生でした。ジャンヌ・ダルクは、信仰に裏付けられた使命の道を全うした殉教の乙女だったのです。

16. ジャンヌ・ダルクの問いかけるもの

最後に、ジャンヌ・ダルクの現代的な意義は、どこにあるのでしょうか、これを確認しておきたいと思います。

第1に、彼女の戦いによって後のいわゆる国家意識というものが植え付けられるようになったということです。神聖なフランス国家はフランス人だけのものであるという意識が芽生えていったのです。イギリス人は自分の国、イギリスに帰るべきであるとも主張されました。これがだんだん発展し、18世紀後半から19世紀にかけてナショナリズムという意識の誕生になっていきます。ジャンヌ・ダルクの戦いは、国家意識を醸成する走りとなったといえましょう。

第2に、100年戦争に終止符を打つきっかけになった、といえます。100年戦争は、ジャンヌ・ダルクのオルレアン解放闘争がひとつの原因となって終わったといえます。100年戦争の終焉は、後に、国民国家を形成する基盤をつくったといわれております。すなわち、彼女の戦いによって、国家というものが確定し、その後のヨーロッパの歴史は、国家単位に動くというように大きく変わっていったのです。国民国家誕生の歴史の扉が開かれたともいえましょう。一人の少女の戦いが新たな歴史創造の原動力となったのです。

第3に、ジャンヌ・ダルクは状況を切り拓くのは人間の能動的、主体的力であるということを証明したということです。彼女は多くの人が諦めかけている時、行動する術を知っていたのです。神のお告げとはいえ、自分の純粋な使命に目覚め、それに立脚した不動の信念と勇氣に燃えて、真っ直ぐに進んでいきました。そして、困難な状況を打破していったのです。炎のような行動への意思が彼女を支配していた、ともいえましょう。歴史は人間の力によって築かれていくのです。

ジャンヌ・ダルクは、純粋な使命感に燃えて、フランスを救い、ヨーロッパの歴史を変え、世界史の新たな扉を開きました。彼女の純粋な信仰とは、教会を通さず、神と直接の交流によって培った不動の信念でした。現代風に言えば、燃えるが如き使命感ともいえましょう。これに目覚めたとき、人間は想像もできない力を発

揮するのです。すなわち、ジャンヌ・ダルクは、過去の不思議な乙女ではありません。伝説の女性ではなく、現代の女性の心の中にも生きている普遍的精神、否、炎の魂、これをジャンヌ・ダルクは体現したのです。

こうした意味で、今日でも、不動の信念に燃えた一人の女性の力によって時代は大きく変わっていくといえましょう。歴史の教訓は今でも生きているのです。

※本稿は、平成 16 年 8 月 28 日(土)、創価大学池田記念講堂で開催された、夏期大学講座での講演です。

主要参考文献一覧

- 1) 村松剛『ジャンヌ・ダルク 愛国心と信仰』(中公新書, 昭和 42 年)
- 2) 高山一彦『ジャンヌ・ダルクの神話』(講談社現代新書, 昭和 57 年)
- 3) アンドレ・ボシュア (新倉俊一訳)『ジャンヌ・ダルク』(白水社, 1987 年)
- 4) 堀越孝一『ジャンヌ＝ダルクの百年戦争』(清水新書, 1989 年)
- 5) ジュール・ミシュレ (森井真・田代稔訳)『ジャンヌ・ダルク』(中公文庫, 1991 年)
- 6) 堀越孝一『ジャンヌ＝ダルク』(朝日文庫, 1991 年)
- 7) レジーヌ・ペルヌー, マリニヴェロニック・クラン (福本直之訳)『ジャンヌ・ダルク』(東京書籍, 1992 年)
- 8) 清水正晴『ジャンヌ・ダルクとその時代』(現代書館, 1994 年)
- 9) 三木宮彦『ジャンヌ・ダルク, 誰? 聖少女の幻影を追って』(フィルムアート社, 1995 年)
- 10) 海生正雄『ジャンヌ・ダルク』(近代文藝社, 1995 年)
- 11) マーク・トウェイン (大久保博訳)『マーク・トウェインのジャンヌ・ダルク』(角川書店, 1996 年)
- 12) 竹下節子『ジャンヌ・ダルク 超異端の聖女』(講談社現代新書, 1997 年)
- 13) 大谷暢順『聖ジャンヌ・ダルク』(中公文庫, 1998 年)
- 14) レジーヌ・ペルヌー (高山一彦訳)『ジャンヌ・ダルクの実像』(白水社, 1995 年)
- 15) 高山一彦編訳『ジャンヌ・ダルク 処刑裁判』(白水社, 2002 年)
- 16) レジーヌ・ペルヌー (高山一彦訳)『ジャンヌ・ダルク 復権裁判』(白水社, 2002 年)
- 17) レジーヌ・ペルヌー (塚本哲也監修, 遠藤ゆかり訳)『奇跡の少女 ジャンヌ・ダルク』(創元社, 2002 年)
- 18) 福本秀子『どこへ行ってもジャンヌ・ダルク 異文化フランスへの旅』(論創社, 2003 年)
- 19) Régine Pernoud et Jean Tulard, *Jeanne d'Arc Napoléon Le paradoxe du biographe*, Édition ou Rocher, 1997.